

阿川弘之 荒川洋治 有吉玉青  
 石川好五 木寛之 伊藤桂一  
 稲畑汀子 井上富雄 井上ひさし  
 岩橋邦枝 上原善広 大河内昭爾  
 岡井隆小 川洋子 奥本大三郎  
 長部日出雄 小澤實小 田島雄志  
 加賀乙彦 梯久美子 鴨下信一  
 川上弘美 岸本佐知子 金田一秀穂  
 久世光彦 黒井千次 小池昌代  
 小島千加子 小島信夫 近藤富枝  
 坂上弘 沢木耕太郎 篠田桃紅  
 島田歌穂 新宮晋 青来有一  
 瀬戸内寂聴 宗左近 高井有一  
 高田宏 高橋順子 竹西寛子  
 竹本住大夫 立原えりか  
 田辺聖子



ベスト・エッセイ2006

# 意地悪な人

日本文藝家協会編

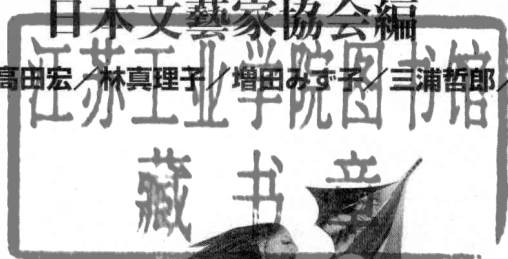
編纂委員＝高田宏／林真理子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

ベスト・エッセイ2006

# 意地悪な人

日本文藝家協会編

編集委員＝高田宏／林真理子／増田みす子／三浦哲郎／三木卓



光村図書

意地悪な人

二〇〇六年六月三十日 第一刷発行

二〇〇六年九月十五日 第二刷発行

編者——日本文藝家協会

発行者——常田 寛

発行所——光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎一、一九・九

郵便番号一四一・八六七五

電話〇三・三四九三・二二二一（代）

印刷所——株式会社加藤文明社

製本所——株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2006 Printed in Japan

ISBN4-89528-399-2 C0095

価格はカバー・帯に表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は禁じられています。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

ベスト・エッセイ2006 意地悪な人

目次

アカボシゴマダラがいた！

飴玉

したがう耳

意地悪な人

「いのち」の記憶

海坂藩の釣り

「モバ」ハルちゃんNYを歩く

「老いの形」見えぬ危うさ

おういクモよ

爆心地の虫たち

思い出の町は銀座

おもて  
面

海外進出した日本語

三木 卓 10

小島 信夫 16

高橋 順子 21

林 真理子 28

沢木 耕太郎 33

丸谷 才一 38

島田 歌穂 42

黒井 千次 45

平田 俊子 49

青来 有一 54

宗 左近 59

藤沢 周 66

張 競 71

知らないでいる

小川洋子

140

詩を翻訳する少年

リービ英雄

145

十五日正午、緊迫のNHK放送室

近藤富枝

151

新年のナラワシ

和合亮一

155

墨の声

篠田桃紅

159

駿府の古本屋

村松友視

164

漱石は名脚本家

鴨下信一

169

太陽と結婚する少女たち

司修

174

『ちびくろ・さんぼ』が帰ってきた

井上富雄

179

強い老婆どこ行った

村田喜代子

183

石仏になる

南木佳士

187

天国からの年賀状

立原えりか

191

唐招提寺との歲月

永井路子

194

記憶を編みなおす	鶴見俊輔	75
金田一家をめぐる誤解	金田一秀穂	78
ゲバラは眠れない	戸井十月	85
越す	古井由吉	89
コソヴォで観る黒澤明	四方田犬彦	97
言葉の新芽すんすん	俵万智	101
昆虫少年の絶滅	奥本大三郎	104
さかのぼる詩の記憶	蜂飼耳	108
桜のころ	伊藤桂一	112
「サツちゃん」の作者逝く	阿川弘之	116
死者を食う蟹	小池昌代	121
芝居翻訳者の楽しみ	小田島雄志	129
饒舌な国インド	石川好	135

糖尿病が軍隊で治った	竹本住大夫	199
ドストエフスキーと「子供」	高田 宏	203
鳥たち	日高敏隆	206
鳥たちの食堂	岩橋邦枝	212
中上健次のカレーライス	上原善広	217
なかなか読めない『平家物語』	矢野誠一	223
夏休み一人ツアー	増田みず子	230
七十本の赤いバラ	林 京子	235
庭先の真理	井上ひさし	240
猫の怪談	出久根達郎	249
俳句になぜ季語を詠み込むか	小澤 實	254
俳句で甦るあの時の思い	稲畑汀子	262
おおらかな多産の作家	大河内昭爾	266



春の花	加賀乙彦	270
半世紀の縁	瀬戸内寂聴	272
美人	連城三紀彦	281
人次第	竹西寛子	284
百寺の旅 千所の旅	五木寛之	287
ふいうち	川上弘美	296
封筒の世界	荒川洋治	301
二人の受賞者	野見山暁治	304
メールの話	有吉玉青	309
浮揚へのあこがれ	新宮 晋	315
古い文献を新しく読む	坂上 弘	320
偏屈な子供	早坂 類	324
方言自由自在	長部日出雄	328

補陀落―海の果て	東野光生	332
骨の話	津島佑子	337
北海道から沖縄へ	宮内勝典	342
骨を洗う	梯久美子	347
ほんのりと匂うもの	岡井隆	353
町のうわさ	田辺聖子	358
燐寸抄 <sup>マッヂ</sup>	久世光彦	361
万太郎の隠れ家	高井有一	366
英国のテロとこの国	矢作俊彦	373
冥界の「ボレロ」	小島千加子	377
フジヤマのトビウオ、多摩川で泳ぐ	古橋広之進	384
珍しいキノコの収集	岸本佐知子	388
道づれ	吉村昭	395

装帧 || 三村 淳

三村 漢

装画 || 奥原しんこ

ベスト・エッセイ2006

意地悪な人

# アカボシゴマダラがいた！

三木 卓

九月十五日、驚くべき事実に出会った。

この日、英勝寺さんの山門再建のためのイベントで、わたしは鎌倉を舞台にした自作の小説『路地』のはなし（作品朗読は牧三千子さん）をしたのだが、それはなかなか楽しかった。驚くべき事実というのは、そのはなしの前に、お寺のみごとなお庭に出たときに出会ったことである。

何気なく見ると、萩の花の上に一匹のチョウがとまっていて、静かに息づいている。

一目見て、まさかと思った。そのチョウは黒い翅脈の紋をもつ中型のチョウだが、うしろ翅のへりにそって赤いちいさな星がっらなっている。

アカボシゴマダラ。

まちがいない。

しかし、どうしてここに。

わたしは、信じられない思いで、もう一回確認した。やはりそうだ。

アカボシゴマダラは、本州にも四国にもいない。日本で唯一生息しているのは、奄美諸島だけである。

三浦半島では、赤い星のない黒いだけのゴマダラチョウなら幾度も見ている。鎌倉にもいるだろう。最近チョウの生息地域に変化が起っているというはなしをときどき聞くが、そのひとつか。

アカボシゴマダラには、中国東北の大連でも出会っているから、奄美と違って、冬寒くてもダイジョウブなのかもしれない。さては東シナ海をわたってきて、居つくようになったのか？

もうひとつの可能性は、台風である。台風の上昇気流に巻き込まれて、高空を台風の目などに入ってしまったまま、やってくることもしばしば報告されている。

しかし、わたしが目撃したチョウの翅には、傷ひとつなく、今羽化したばかり、というみずみずしきを感じさせた。大連産が居ついたのなら、赤い星が、奄美産よりもつぶれているところがある。それを確かめたい、と思ったが、そのときチョウは空に舞い上がり、姿を消した。

夢のようである。あるいは鎌倉のことだ。だからファンがいて、サナギから育てて羽化させたものが、逃げ出したのか。そういうことも考えられる。

と想っていたら、これは二週間後の九月二十九日のお昼ごろのこと、車を拾おうと思つて、段葛の三河屋さんのほうへ、道路を横断した。すると、そばのお店のショー・ウインドウの中で、バタバタはばたいているものがある。

チョウとあらば、ひとまず見る、というのがわたしの習性である。それで寄っていった。内側に閉じ込められているチョウは、なんとまたまたアカボシゴマダラである。間違いない。アカボシゴマダラが一匹、ウスバキトンボとともに、自動ドアとショー・ウインドウのあいだに閉じ込められている！

これはもう、だれかが飼育したのが逃げたとか、台風で来たとか、そういうことではな

いと考えるべきだ。アカボシゴマダラが、居ついたのである。

このチョウの食樹は、リュウキュウエノキである。鎌倉にはエノキがあるから、それと間に合うのかもしれない。かつて、わざわざ名瀬までこのチョウを見に行つて、むなしかつたことを思い出すと実にヘンな気分だ。まさかまさか、わたしの誤認ではないと思うが、ここは専門家の意見を聞きたいものである。

十月三日、「フクちゃんの復活を祝う夕べ」に出席した。

〈フクちゃん〉は、いわずと知れた横山隆一さんのマンガの主人公である。わたしなどはご幼少の砌みぎり、新聞の四コママンガで、ワセダの角帽をかぶっている幼いフクちゃんの可愛い活躍を、大いに楽しませていただいた。新聞四コママンガの代名詞のようなもので、その横山隆一さんは、一九三七年から鎌倉に住んで、九十過ぎまで元氣にお仕事をされた。亡くなられたのは二〇〇〇年である。鎌倉ペンクラブ（第一次）のマスコットの存在で、文化功労者にもなられ、鎌倉市の名誉市民にもなられた。わたしの、この日記が連載されている「かまくら春秋」の表紙もずっと描き続けていらした。



その横山隆一郎は、御成にあったが、貴重なものは故郷の高知に建物ごともって行って記念館になった。で、その跡地というものがあつたわけだが、今度その跡地の一部が喫茶店になり、そのお店から眺めるかたちで横山邸のお庭が再現された。ギャラリーもある。〈復活を祝う夕べ〉というのは、つまりそういうことである。

漫画集団のみなさんや地元的面々でこの夕べは催されたが、当日はじつにぎやか。いろいろな知った面々がいて、初対面の人たちがいて（あたりまえか）、柵のそこから、なんと『魔女の宅急便』の角野栄子さんとお嬢さんから声を掛けられたり、タイヘンダア。さっそくどうなっているか覗いてみた。まず目に入るのは、横山家のプールである。底まで真っ青に塗られていて、いかにも画家のものというこのプールには、かつて酔っ払った大佛次郎が転落した、という。きつと、そんな夏の夜があつただろう、と思わせる。

このプールの上には、サクラの古木が枝を差しかけ、脇には可愛らしい藤棚が、その脇にはウメの木もある。いずれも横山さんが愛してやまなかつた木々たちだろう。

お庭の横には、展示ギャラリーがあつた。なかに横山さんのウィットに富んだ作品、「珍魚集合」とか「飛行機図録」とかが飾られている。この人は、いつまでも楽しい生きた絵